

令和4年度第2回小田原市青少年未来会議 会議録

1 日 時：令和5年3月8日（水） 午後3時～4時30分

2 会 場：小田原市役所本庁舎 大会議室（7階）

3 出席者

(1) 委員 笠原会長会長、本多副会長、堀内委員、富樫委員、永森委員
益田委員、栞原委員、岩崎委員、赤羽委員、伊東委員、竹内委員

(2) 市職員 【子ども青少年部】 山下部長、吉野副部長
【子ども青少年支援課】 有泉課長、上田係長
【青少年課（事務局）】 濱野課長、横山副課長、吉村主査、神田主任、
内田主事、小西主事補

(3) 傍聴者 0人

4 次第

(1) 開会

(2) 会長挨拶

本日は、春めいた季節で、市内・県内の中学校卒業式が行われていた。なかなか卒業式入学式は天候に恵まれることが少ない季節で管理職としては頭を悩ませられるが、今日のような天候に恵まれた日に、コロナ禍を過ごしてきた学生たちが無事に卒業式を迎えたことを感慨深く感じている。本日は青少年健全育成施策方針の柱となる目標について、皆様から忌憚のない御意見をいただき、協議を進めていきたい。今年度、県に支援指針が改定となっており手元にご用意されている。そういった資料を参考にしながら皆様からの意見を頂戴したい。未来会議といった名称に変わった背景、担っているもの、大事な部分である未来志向といったところが重要なポイントとなる。それらを踏まえて意見を出してほしい。よろしくお願ひします。

伊東留奈委員より 自己紹介

小学生の頃から大学生まで青少年課の事業に携わってきた。今度は子どもたちのために何かできないか考えていた。皆さんのように特別な知識があるわけではないが、小田原市の子どものために何かしたいという気持ちは強いので、一生懸命頑張りたい。よろしくお願ひします。

(3) 議題

ア 「（仮称）小田原市青少年健全育成施策推進方針」について

イ 部会員の選出について

(4) その他(事務連絡等)

(5) 閉会

5 会議の概要 【議事進行は笠原会長】

議 題	
(1) 協議事項	
ア 「（仮称）小田原市青少年健全育成施策推進方針」について	
事務局（横山副課長）	資料のとおり説明。
笠原会長	資料1を中心に説明いただいたが、協議に移る前に、今の事務局の説明について、質問等があれば仰っていただきたい。方針の施策の趣旨、対象年齢等で何かご意見等はあるか。 事前に配布しているので、確認していただいている前提ではあるが、特段確認があるとか、補足説明、改善案等、率直な意見を言っていただきたい。無ければ協議に移る。

	<p>方針に基づいて、また、方針の体系を確認していただき、目標について意見をいただきたい。</p> <p>資料の2、3については、整理していただいている、県の指針、関連計画に示されている目標の部分、他市の指針の部分の抜粋となっている。資料の4はまちづくりについて、参考5は前身の会議体である青少年問題協議会からの答申となっており、資料3ページにある小田原市の青少年育成指針を作るのならこういった方向でと書いてあるため、それらを参考にしながら、ご意見をいただきたい。意見はホワイトボードに集約するため、意見の整理に役立ててほしい。</p>
永森委員	<p>考えはまとまっていないが、青少年向けの施策を考えたとき、大人と共生してやっていくのか、自立支援なのか。二つの方向があると思う。他市を参考にすると、共生で行くのか、助けていくのか分かれている気がする。小田原市としてどうするのか自分の中ではまとまっていないが、目標としては共生であるのかなと思う。大人とともにやっていく。自立する人とともに支えあってやっていく。そういったニュアンスが良いと思った。</p>
笠原会長	<p>この辺りをきっかけに皆さんの意見はあるか。</p> <p>永森さんが言った、大人とともにやるといった考えになる根拠はあるのか。</p>
永森委員	<p>青少年の育成関係の活動でやってみて分かったのは、年齢が高い人が子どもに向けて何かしていることが多い。子どもの発する意見は、大人の目線であれしなさい、これしなさいと言われてやってしまっていることが見受けられる。子どもは言われた通りでいいやと思ってしまわないか。そういった疑問がある。今の時代の子どもたちは、我々が子どもだった頃よりもよく考えていて、自分が何をすべきかといった思考能力を想像以上に備えている。そうしたとき、大人からの目線で価値観を強制するべきではないと思った。そうすると子どもは大人に言われたとおりにやればいいのかと思ってしまう。子どもたちの個性を尊重してあげるべきだと活動しながら思った。</p>
笠原会長	<p>こういった活動に参加してきた伊東さんは、永森さんの話を聞いてどう思うか。</p>
伊東委員	<p>こういった活動に参加される大人の方たちは、押し付けをしってくる人は少ないのかなと感じている。ただ、目標を立てる上では、資料1-1では市民共通の道しるべとなっているので、やはり共生といったことは大事だと思う。</p>
本多委員	<p>子ども会をやっていると、色々決めるのは大人。参加者が子ども。あれをしなさいこれをしなさいとやっているうちに、自主的に動く人が出てくる。オーシャンクルーズをやっていたが、長い目で見れば、自主的な子どもを育てる事業であったように感じる。自分にやってくれたことを誰かにやろうと思う子が出てくる。オーシャンクルーズを経てジュニア、ユースになったり、市の職員になって青少年課に配属されたといった職員もいた。ある程度の押し付けの中で、自主性が発揮されて自分がやりたいことが出てくることもある。その中から拾ってあげるといったことも必要かと思う。</p>
堀内委員	<p>子どもの参画というロジャーハートが定義した議論がある。参画の梯子があって、8段階の梯子が図で表されている。もっとも上の梯子の段にいる子どもたちの関わり方は、子どもが考えて、大人とともに決定していく。一番下の段は操り参画といった表現がされている。それは大人たちがお膳</p>

	<p>立てしてあげた中で、自分たちが関わっていく状況で、段階的にその梯子を上って、自立的に子どもたちが活動できるようになっていく。そういったなかで感じたことは、子どもたちが主体的にと言った言葉が印象に残った。とても大事だがどうやったら主体的になれるのか考えた。私の解釈では、子どもたちが自分で意思決定できるといったことかなと感じている。意思決定できる環境が保障されているとともに、それを決定していくための、判断するための情報に触れる機会がある。そこで自分たちで考えて何かを決断していく。それを支援するような大人の関わり方は何だろうと考えている。</p>
竹内委員	<p>堀内委員に共感している。その上で、自立と共生どちらなのかに関してですが、個人的にはどちらかを取るといった相反する二択ではないと思っている。自立をしていく中で、その先で大人と協同していく。またはその逆で大人と共生する中で自立心を育てていく。その二つは相互に関係するような物事と捉えている。</p>
岩崎委員	<p>方針の対象に乳幼児から青年期と示されている。その中で重点支援については、小学校高学年から青年期だが、非常に幅広い年齢層が対象だと思った。自立と共生は相反するものではないと考えている。SNS であるとか、色々と情報が氾濫する中で、守られなければならない年齢層もいれば、自分で判断できる青年期もいる。自立と共生はセットで考えていくものでいいと思う。</p>
益田委員	<p>考えはまとまっていないが、自立と共生は相反するものではない。自立をした人間が共生していく、共生するために自立を支援する考え方。こういったことに参加したり触れたりする子どもは一握りなので、伊東さんのように会議に出てこようと思う子は少ない。それをどうやって市全体の子どもに広げていくか。そこに重きを置くべきではないか。市全体の底上げを考えていく。一部の子たちに対してではなく。誰と共生していくわけでもないが、一緒に社会を作っていく、それは大人でも子どもでも一緒。一部に対してではなく、といったことが大切かと思う。子ども子育て支援事業計画、教育振興基本計画は、乳幼児から中学生あたりまでが対象となっている。今回の方針はその途中からもうちょっと先ってことで、年齢がそこから外れている人たちが対象で、繋ぎの部分なので、関連計画とバラバラにならないような目標にしたいと思っている。</p>
笠原会長	<p>皆さんから意見をいただくことで、すこしずつ意見が具体化してきたように見える。</p>
栞原委員	<p>小学校の現場から考えると指示待ちな子が多いが、大人が準備をして経験をさせてあげることが大事。何か経験する場があつて、それを経験したから次に向かえる。それが出来たから次のステップに行きたい。そういった場は大人が準備してあげる。一緒に考えてあげるといったことが重要になってくる。そういったことが共生といった表現でよいのかわからないが。最初の一步は、ハードルを高くしすぎない。うまく転がってゆき、2030年になった時には、様々な実績が出来上がっているのかもしれない。小さいうちにやってきたことが育っていくうちに、自発的にやりたいことの基礎になるといった考えを持っている。経験をしていくことが次につながっていくのだろうと思う。</p>
富樫委員	<p>青少年課の事業等に10年間近く携わってきた。その中で養成講座のキャンプは、ジュニアリーダーズクラブの子たちがリーダー役。それを見てい</p>

	る限り、自主性のある子もいればそうでない子もいる。自主性、共生は使い分ければいいと感じている。
赤羽委員	普段仕事をしているうで、自立と共生とは何か考えてみると、挑戦しなさい、周りを巻き込みなさい。と言われていた。要するに、自分で考えて行動に移す。周りと共生することでそれが力となって、10にも100にもなる。そういった考えのもとで仕事をしている。そういった意味で自立と共生は一緒に存在すると考えている。個人的には、子どもにとっても方針や目標が必要だと考えている。小田原市のロードマップにもあるとおり、夢と希望を子どもに持たせるといふ、志を持ってもらうことが大切なのではと考えている。昔の格言だと「青年よ大志を抱け」、「パワーオブザドリーム」そんな言葉もある。そういったことを大切にしたい。自立だったり共生の前に、その原動力となる、夢・希望・志が方針や目標にあってもいいのかなと思った。
笠原会長	少し時間を取るのでホワイトボードを確認していただき、さらに意見をいただきたい。全員の意見を聞いてみて永森さんはどう考えましたか。
永森委員	いろんな意見を聞いてみて、自分の思ったところとは違う意見があるなど思った。相反するものではなく要所所で使い分けていく、といったところがあるなど感じた。目標となると、最終目標、ゴールを決めないといけない。目標が高く到達しないといったことが会社でよくある。高すぎる目標なのか、こうあればいいといったところなのか、こうしていくことが小田原に必要なんだといった目標が存在するのか。ただし、あまりにも抽象的すぎると難しいものになるなど思った。
笠原会長	益田委員は市全体の子どものことを考えなければいけない。永森委員の言うゴールを高くするといったことと、全体を巻き込んでいくといったことこの辺の関係性を考えてどう思うか
益田委員	目標は目標であって目標でしかないと思う気がする。
事務局（山下部長）	資料4をご覧ください。小田原市まちづくりの目標として、子どもが夢や希望を持って成長できるまちといった最終目標はある。そしてこういった目標を達成するには、子どもたちの成長にどういったことが必要か。また、どうすればそういった子どもたちを育てられるのかといったこと、そういったことを、様々な立場で子どもたちと接しているとき何を重視しているのか意見をいただけたらいいのかなと思った。 また、永森委員から意見があった件だが、資料3をご覧ください。他市の指針の目標と基本方針、神奈川県についてだが子どもたちが自主的にやっていくのかそれとも、大人がまず支えてあげるのかといったところだが、県では青少年の健やかな成長を支えといったところが改定されて、子ども若者が主体的に生きるといったところに改定された。そこで、やはり今は、子どもたちの自主性に重きを置くといったところかなと感じている。
笠原会長	事務局からの補足の説明であった。少なくともそれらを踏まえつつも、すべての子どもたちを巻き込むにはどうすればいいのか考えていくことは重要。永森委員の言ったゴールについては、市としての最終的なゴールといったところで議論いただく部分になるといった認識を持っていただく。現実的には、そこから零れ落ちてしまう子どもたちがいるといったときに、ここでどういったゴールを目指すのか。それも必要になってくる。様々な子どもたちを絡めとることは重要かと思う。

益田委員	県の目標が子ども若者が主体的に生きることを支援し、自立参加共生を進める社会、というのがそのまま目標でいいのではと思う。そこに小田原らしさを追加していく、どのように落とし込んでいくか。具体的には一部の子ではなく、広く子どもたちに目標に達するための支援を、施策を通してやっていきたい。その中で、どのようにすべての子どもたちに接することが出来るようにするかを考えることが必要。県の目標はいいものだと思う。
笠原会長	いろんな考えがあることは良いことかと思う。
伊東委員	子どもが夢や希望をもって成長できるためには、子どもが安心感や不安を抱えたりしない、子どもたちに安心感や自信を持ってもらえるようにすることが大事かなと思った。
笠原会長	夢、希望、志を持つためには、自信を持てる環境や体験が保証される場が必要ってことかと思う。先ほど話をいただいた参画の梯子で、8段階は子どもが考えて大人と決定していく、そこに至るまでにも、伊東委員が言われたことも関わってくると思うかいかがか。
堀内委員	最初は大人で、様々な立場の大人が子どもたちに体験の機会を与える。どんな体験を用意したらいいのか、どんな体験に出会わせてあげられるのか、そこが大事だと思う。また、市としての子どもたちの育成の目標を掲げたときに、目標とともに描き出される子どもたちの姿はどんな姿かと具体的に思った。みんなが主体的にと言った形で、この町の一人として、関わっていける姿を想像したとき、どんなことをすれば力が発揮できるのかと考えた。そういったことを考えたときに、具体的な実施の施策が考えられるのかなと思った。
笠原会長	具体的な子どもの姿といったものがあれば事務局からお願いします。
事務局（吉村主査）	この会議の前に会長と打ち合わせをさせていただいた。 委員の皆さんの話からあったように、最初は大人が環境作りをすること、体験を持たせる場を作っていくことが大切だと思う。そのあと、子どもたちが自主的に考えられるようになる、行動を起こしていけるようになる流れがいいよねといった話をした。 資料4にある、総合計画の目標にある、「子どもが夢や希望をもって成長出来るまち」まちづくりの目標として記載させていただいた。その中でも、郷土愛を持った人に成長しているとか、社会を創る力を身に着けるとか。小田原市が好きという気持ちが生まれてくることで、夢や希望を持って、小田原のために何かしたい。恩返ししたいといった気持ちをもってくれる子どもが増えるといいなと思っている。そういった子どもが最終的に多く出てきてくれるといいなと考えている。
笠原会長	こういった目標は抽象度が高くなりがち。どこにでも通用するものになりがちである。小田原市がこれを作る意味を考えたとき、小田原で生活している方々のほうが具体案があるのでは。
赤羽委員	小田原ならではないのかもしれないが、子どもと接しているときに、朝、子どもを急かすと遅くなる。逆に安心させてあげて、子どもの調子が乗っていると子どもは言わなくても自主的になる。心の安定が守られていることが、自主的に行動するためには大切な要素だと思った。
竹内委員	神奈川県改定後の文書に基本的に賛成しているが、懸念していることが県として置く目標と、市として置く目標では規模感が違う。市であればより具体性が必要になるのではと思った。主体的といった表現は大切だと思うが、主体的・主体性は類似する文言が多い。自主性と混同してしまう

	ケースが多い。主体性といったワードを使い小田原らしさを出すのであれば、具体性が欲しいなと思った。その方が望ましいと考えている。
笠原会長	県の管轄する目標と、市の目標のなかで描いていくものは当然変わってくるだろう。それらを踏まえた上で、主体性、自主性等の文言をどう捉えるか。安心して集える機会、担い手の育成、現段階では直接的に出てきていないが、いかに子どもの自主性を引き出すのかといった発想だと思う。
栗原委員	資料3にある伊勢原市や平塚市のような目標を考えるイメージなのか。二つの市は特に市のらしさといった文言は見当たらない。目標の段階で、小田原は小田原らしさのようなものを作るのか。他市は抽象的なところから始まっている。基本方針や実施施策で小田原らしさを出すのか。
笠原会長	一番の議題は目標に対する意見ではあるが、基本方針も整備するため、多岐にわたって意見をもらっている。ただし目標は大きく捉えて、汎用性があるものとするならば、それはそれで良いかと思う。具体的な方が良ければそれでもいい。どちらの意見でもよい。基本は目標の話ではある。部会で整理していくが、具体的な案であれば、目標ではなく方針になっていく場合もある。本日は、あまり気になさらずに、ご自身の御意見言っていたければと思う。を
益田委員	教育基本振興計画、子ども子育て支援計画の骨子の中には、基本方針に地域ぐるみ等の地域全体で整える、といった文言が入っている。目標を立てるときには地域全体で子どもたちの自立共生を支えるといった文言を加えると、整合性も取れて小田原らしさが出ると思う。
笠原会長	部会でまとめていくのに、色々な意見があったほうが良い。
岩崎委員	益田委員に通じるが、児童相談所の立場から言うと、ヤングケアラーや貧困等を主に扱っている。児童人口が減る中で、こういった対象の子が増えている。こういった子どもたちが夢や希望を持って成長できるとはどういったことなのか。健全育成とは何だろうと考えると、社会が健全でないと子どもたちが健全に育たない。地域が健全であれば子どもたちも健全になる。地域ぐるみといった言葉があっている。他の自治体でも児童相談所で務めていた。小田原児童相談所は保護所を併設していない。小田原は保護が必要でない場合のことが多く出てきている。小田原の強みは、SNSが広がる中でも、人との繋がりがまだ多いと思うし、それが小田原らしさだと思った。児童相談所はセーフティーネットで対症療法しかできない。ただ、社会が健全であればそういった子どもたちは減る。大人たちの責任も求められていると思った。
笠原会長	小田原市は自治会の組織が非常に機能している。それぞれの地域で、どのような活動をすれば、子どもたちを支えられるか、非常に明確なものを持っていると感じた。小田原の地域性がそういったものを育んできていると感じる。ただ、何もしなければそういったものは育たない。何もしなくなったらそういったものは無くなってしまう。今回指針を出すことで、改めて地域で育つ若者を支え、自立させていくか。どうやったらいいのか。地域の人たちが支えていこう、一緒に育てていこう。そういった思いや考えが必要だ。
竹内委員	言葉一つで行動が変わる。だからこそしっかりと議論が必要だと思う。先ほどお話をいただいた中で、地域ぐるみという表現に小田原らしさを感じた。 小田原らしさを含めて具体化させるが主な議題かと思う。主体的といった言葉を小田原という観点からどう定義するかが、具体化するためのきっか

	けかと思う。堀内委員が仰った、主体的な背景として、自己決定力は重要な要素であり、それと同時に行動力が必要。その二つの要素があって始めて主体的になると思っている。この二つの要素は大きいと思う。
堀内委員	言うのは簡単だが、自分で決定するのは子どもにとっては、迷うしとても難しいことだと思う。自分で決定できるだけの十分な自問自答や、葛藤が出来る場面、大人の意見を聞いたり、迷いながら考えることが出来る時間、場所も保証されていることが大事。それは安心できる環境で、安心出来る大人と一緒にいないと、自分で深めていくことは出来ないだろうと考える。
笠原会長	小学校の現場から意見はあるか。低学年であれば低学年なりの自己決定もあると思うがいかかか。
栗原委員	様々な子がいる。小さい子でも決められる子がいる。経験させる、体験させる、そこで様々な判断材料があるから出来るようになる。これを積み重ねていくことで、決めることが出来る子になる。大人が意図的にやらないと出来ないことはたくさんある。何もしないと出来るようにはならないと感じる。そこに力を入れたクラスは、自己決定ができるクラスになると見て思う。それは学校全体で力を入れなくてはならないと思って、教育目標などを立てる。まだ時間がかかることではあるし、難しいと感じる子どもがいることも事実ではある。
本多委員	県や平塚には、青少年は地域活動に参加しなさい、地域のために動きなさいよといったことを謳っている。実際問題は、地域活動の担い手は高齢者が多い。若者の頃から地域活動に参加しなさいと言った文言を入れることで、地域の活動に抵抗のない子を育てることに繋がる。
笠原会長	主体的といった言葉を定義する場合、具体的にこういった言葉を押さえておきたいといった案はあるか。
竹内委員	主体的も複合的な言葉である。それを分解すると、要素としては自己決定力と行動力によるところが大きい。これの土台は自己肯定感や自己有用感など自分における信頼というところだと思う。これを持って主体性が生まれると感じる。これらがキーワードになるのではと思う。
赤羽委員	正解のない世の中で、自分で考えて決定して、行動する条件の中で、結果的に失敗することのほうが多い。それを許容してあげる社会、環境が必要かと思った。挑戦を支援する環境があると良いと感じた。
笠原会長	全てをこの場でまとめるのは難しい。後は皆さんから意見票をいただきたい。これをベースに次の会議で素案を提案できるようにしたい。議題1アはこれをもって終了する。
イ 部会員の選出について	
事務局（横山副課長）	資料のとおり説明。
笠原会長	青少年未来会議名簿をご確認いただきたい。益田委員、本多副会長、赤羽委員の3名に部会員をお願いしたいと思う。3名の方、よろしく願います。